社会文学・一九二〇年前後

不二出版

平林初之輔と同時代文学

⊙平林初之輔〈一八九二―一九三一〉

……平林は全体としては既成文壇の全否定から破壊を叫んでやまぬ高い文学的要求をもっていたが作品個々の批評に対しては是々非々であり、的確な評価を下していたといってよい。いわば理想論と現状論の使い分けである。このような点からわたしは、平林初之輔が鋭い鑑賞眼をそなえて、しかも文学のトータリティーを志向してやまぬ一級の文芸批評家であると考えたい。

⊙渡 平民〈一八九八―一九三五〉

大和田茂

⊙宮地嘉六〈一八八四―一九五八〉

……関東大震災前、社会主義運動が最も高揚し、「プロレタリア文学」や「第四階級の文学」がさかんに主張されていたこの時期、芸術の自律性を説く一方で、「労働文学の草分け」としての自負をもちながらも、宮地はこのように実際運動から離れたところでプロレタリア文学の創造を考えていた。

社会文学・一九二〇年前後

大和田茂

⊙平林初之輔（一八九二―一九三二）

⊙宮地嘉六（一八八四―一九五八）

平林初之輔と同時代文学

不二出版

〈著者紹介〉

大和田 茂（おおわだ・しげる）

1950年、東京都豊島区に生まれる。
法政大学大学院日本文学専攻博士課程中退。
東京都立荻窪高等学校、向丘高等学校教諭、法政大学文学部講師、都立航空工業高専講師を経て、現在、都立城北高等学校教諭。
著書・論文『宮地嘉六著作集』（共編著、1985年、慶友社）「志賀直哉—心境小説家の陥穽」（『戦争と文学者』、1983年、三一書房）「平林初之輔のフェミニズム思想」（『磁界』第2号、1992年）ほか。

社会文学・一九二〇年前後
——平林初之輔と同時代文学　　本体価格2,800円

1992年6月6日 第1刷発行

著　者　大和田　茂
発行者　船橋　治

検印廃止　発行所　不二出版㈱
〒113 東京都文京区向丘1—2—12
☎03(3812)4433　振替東京6—94084
印刷所　埼玉福祉会
製本所　吉田製本工房

落丁，乱丁本はおとりかえいたします。　©1992

目次

Ⅰ 平林初之輔論——前期の仕事を中心に

平林初之輔の再検討——「反抗の文学」から「戦闘の文学」まで……8

平林初之輔の労働文学観……34

平林初之輔・中西伊之助・尾崎士郎——「ごろつき」論争をめぐって……48

社会運動家としての平林初之輔……68

平林初之輔研究の現在……95

Ⅱ 労働文学の作家たち

宮地嘉六論——労働小説家から文壇私小説家へ……104

若き民衆作家丹潔——その生涯と仕事……121

劇作家渡平民素描……140
中西伊之助序論――作家への道程……162
加藤一夫と武者小路実篤――「新しき村」論争前後……188

Ⅲ 第一次世界大戦と文学

第一次世界大戦と日本文学……202
日本文学に描かれたシベリア出兵……220
一九一〇年代を中心とした反戦・反軍小説について……241

Ⅳ 一九一〇年代社会文芸雑誌の研究

『科学と文芸』――一〇年代デモクラシーと民衆芸術論……270
『労働文学』――プロレタリア文学への先駆的役割……286

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もうひとつの『婦人文芸』……300
『中外』と新人作家——宮地嘉六の場合……320
あとがき……327
初出一覧……329
人名索引……(1)

装丁—山崎一夫

社会文学・一九二〇年前後

――平林初之輔と同時代文学

I

平林初之輔論——前期の仕事を中心に

平林初之輔の再検討
――「反抗の文学」から「戦闘の文学」まで

1

戦後、平林初之輔再評価の嚆矢となったのは、周知のように平野謙の「平林初之輔」（一九五六年九月一日『図書新聞』）であるが、その中で平野は「ただ一般の文学史には、平林初之輔は初期の唯物史観的文学理論の建設とこの二元的懐疑論の問題提起とによって、その名を録されるにとどまるのではないか、という懸念が私にはある。ということは、文芸批評家平林初之輔の本領は、その二点によっては決して代表されない（中略）いわば先駆的な芸術社会学的研究にこそ、平林初之輔の本領はもっともよく代表されていると思う。」と述べている。またこの評論の翌年には筑摩書房版『現代日本文学全集78・平林初之輔・青野季吉・蔵原惟人・中野重治集』（一九五七年一一月）の「解説」で、平野は平林に対し同様の評価を与えるとともに一歩すすめて「平林初之輔の本領は私見によれば、よき実証主義者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たるところにある。『唯物史観と文学』などを書いたころは、平林もつとめてマルクス主義者の立場から発言しようとしているが、その真骨頂は聡明な実証主義者という点にある。」と再度、強調している。

わずか一五年にもみたぬ文芸評論活動のあいだに、多方面にわたる仕事をした平林初之輔は、平野の語るように、はたしてその「本領」が実証主義的な面に代表されたのであろうか。たしかに、大筋において「唯物史観による最初の文学理論の建設者たる平林初之輔だったにもかかわらず、プロレタリア文学運動の功利主義的限界にもっとも早く気づいたのも平林初之輔ではなかったか」と述べる平野の評価は、今日でもいささかも古びていないばかりか、その後いくつか現れた平林論もこの平野の見解を一歩も出るものではないといってよい。しかし初期プロレタリア文学理論の建設者として、またプロレタリア文学運動の数少ない批判者の一人として、二重の業績を担うこの文芸批評家を一貫して支えた「本領」がかれの実証主義的資質にあると断定を加えるとき、わたしは平野の平林評価への疑問を禁じ得ない。むろん、テーヌを中心とした自然主義文学理論の研究や、「日本に於ける浪漫派の先駆者としての北村透谷」（一九二九年九月『新潮』）をはじめとする日本近代文学史研究や、いくつかの社会科学的論文などにあらわれた平林の実証主義的態度は、その生涯において重要な位置をしめる。しかし、それがかれの本質ではない。平林がいわゆる実証主義的研究に手をそめるのは、主として一般的にかれの「後期」といわれる関東大震災後、一九二四年ごろからである。震災以前は専ら『新潮』『早稲田文学』『読売新聞』などの文芸時評で活躍し、かたわら唯物史観的立場からプロレタリア

文学理論の構築に力を注いでいた。震災後は平野の指摘するようにおそらく「プロレタリア革命ではなく、広汎なブルジョア民主主義革命の成熟こそ現在の日本には必要であり、尖鋭なマルクス主義文学ではなくて、ナイーブな労働者的反抗という感覚や情念を晶化するところに、プロレタリア文学のゆくべき道を平林は眺めていた」ために、明治維新後の日本の近代及びその文学の再検討が要請され、平林は『日本自由主義発達史』（一九二四年四月世界思潮研究会）をはじめ、日本の資本主義的思想、文化の研究に入っていった。よって、平林初之輔を貫く一本の糸を実証主義的態度に求めるのは適当でなく、むしろ平野自身も述べているように「政治的価値と芸術的価値」（一九二九年三月『新潮』）をメルクマールとした「平林の批評家的真面目」にあくまでかれの本領を注目し、「政治と文学」の関係性の中で一貫して平林初之輔の文芸批評家としての本質をとらえていかなければならないと考える。

青野季吉は、先駆的な「平林初之輔論」（一九三一年八月『新潮』）の中で「文芸批評家・理論家としての平林はさまざまな優れた資格を具へてゐた。彼のするどい直覚力や、作品批評の場合には、必らず何処かにキラリと光つてゐた明敏な頭脳や、澄んだ知識性については改めて云ふまい。」と述べている。青野の平林論は、プロレタリア文学の理論家としての平林にも、文芸批評家としての平林に対しても、かれのマルクス主義把握の不充分をもって過小に評価している点で平野の再評価とは逆の方向にある。しかし、その論調は全体に好意的で、かつての僚友平林の文学的資質を言い得たものとして示唆的である。

いま、『やまと新聞』以来の文芸時評などを読みかえしてみるとき、その豊かな鑑賞力と生気潑剌と

した語り口で、いささかの妥協も許さず当時の文学状況へ鋭く切りこんでいった平林の勇姿をわたしたちは彷彿として目にうかべることだろう。文芸批評家平林初之輔を支えていた根本的なものが「するどい直覚力」と「何処かにキラリと光つてゐた明敏な頭脳や、澄んだ知識性」であることはまちがいない。これらの平林の批評家的本質を何と名づけるかは今後のわたしの課題であるが、『やまと新聞』に書いたつぎのような言葉は注目すべきである。

今日は評論を二つ読む。第一は竹友藻風氏の審美批評論（三田文学）である。竹友氏の文章は故上田柳村氏の衣鉢を偲ばせるエキゾチックな上品な文である。勿論故人の音楽的技巧には到底及びもつかないにしても。しかし上田博士が青年時代から一生を通じて崇拝したペーターの審美批評を今更論壇に提出されたことにどれだけの意味があるか？　印象批評の弊といふやうな無責任な説をなす論者には尚多少啓蒙の力をもつてゐるか知らないが、一般の文壇では主観主義と客観主義との争ひはもう決着してゐるのだ。普遍と特殊、絶対と相対、主観と客観といふやうな抽象的な争ひが現実の文壇に何の権威があらう、文学批評は飽く迄主観的である、けれど主観の中に主観を超越した何物かゞなければ批評が成立しないことも確かだ。（一九一九年八月七日「八月の文壇」）

このような批評的確信を、文芸批評を書きはじめたごく初期から平林がもっていたということは、

注目に値すべきではないか。平林は、文芸批評の基準である「主観を超越した何物か」を最後まで解明し得なかったが（ただし当時かれはそれを「芸術のゾルレン」としてわりきろうとしていた）あくまでその「主観を超越した何物か」に忠実に批評活動を行った。平林初之輔は、その生涯のほとんどを社会性及び思想性豊かな文学の追求に費やし、「政治と文学」のあいだに身をおいて、その両者の関係を闡明せんがために悪戦苦闘してみち半ばにして斃れた批評家である。その文学的生涯の頂点は「政治的価値と芸術的価値」であることはいうまでもないが、私見にしたがえば、この「政治と文学」の統一問題は一九二一年以降から関東大震災までのいわゆる『無産階級の文化』（一九二三年一月早稲田泰文社）の時代にもうかがえるばかりか、それ以前のロマンチシズム文学提唱の時代（一九一九年から二一年）に実はすでに胚胎していたのではないか、と考えたい。

伴悦は「平林初之輔論」（一九六六年一〇月〈文学批評の会〉編『プロレタリア文学研究』所収）において、平林のいわゆる二元論的「懐疑」への道を探らんとして『やまと新聞』以来の文芸時評から『無産階級の文化』の時代の評論までをとりあげ、結局、「文芸運動と労働運動」（一九二二年六月『種蒔く人』）とそれに付随する、中西伊之助とのいわゆる「ごろつき食い倒し」論争に平林の「懐疑」の影が色濃く落されているとみている。すなわち、この時代が「文芸運動理論家としての平林の最も精力的な輝ける時期であった」にもかかわらず、そこには「労働実践家」に対するプチブル・インテリゲンチャとしての限界の自覚から発した自己自身への「懐疑」がひそんでいた、と伴はみている。

はたして「文芸運動と労働運動」のどこに伴のいう平林の「懐疑」がみられるというのだろう。伴

は「僕は実際直接労働運動に携はつたこともなく、またその能力も覚束ないから、その点に関しては指導されんことを希望する。」といった平林の言葉をかれ一流のイロニーとは解さず、単にプチブル・インテリゲンチャの限界を表白したものと解読しているらしい。平林はこの時期、唯物史観的文学理論の構築とそれをいかに労働者の解放運動に結びつけ展開していくかということで、俗に言って脂の乗りきっていた時期であり、この志向は震災直前まで高まっていく。現に『プロレタリア文学綱領』（一九二三年四月世界思潮研究会）のために書かれた「無産者文学のプログラム」では、「文芸運動と労働運動」にあった「要するにプロレタリアの文芸運動はそれ自身絶対意義を有するものではない。（中略）一種の補助運動牽制運動と言つてもいい位だ。」という認識を修正して、プロレタリア文学運動は「政治闘争と並行すべき文化闘争の一部として、階級闘争の戦列を形成しなければならぬ。」「即ちプロレタリア文学の任務は、有効な、階級戦線の分担である。」と述べ、伴のいう「懐疑」などいさかも感じられないどころか、平林のプロレタリア文学運動への志向はますます堅固となるばかりなのである（これに関しては、西田勝の指摘――「平林初之輔の小冊子『プロレタリア文学綱領』」一九六七年二月『文学的立場』第一〇号――がすでにある）。

また、このころ問題となった有島武郎の「宣言一つ」（一九二二年一月『改造』）について、平林がどのようにみていたかといえば、「有島氏の宣言は歴史的必然の上になされたものでなく、機械的宿命観を表白したものである。」「要するに私は学者や思想家と第四階級との間が絶縁されてゐるといふ考へ方はほんたうでないと思ふ。（中略）それは空虚な言論に何等かの権威がある為めではなく、学者は同

時に実際の人間として、普通の人間と同じく戦闘単位であるからである。」（「新年号の評論から」一九二二年二月『新潮』）という言葉から明らかなように、伴のいうようなプロレタリア文学運動におけるプチブル・インテリゲンチャの限界性の自覚など平林にはまったくなく、ましてその自覚が後年の「政治的価値と芸術的価値」の問題提起を生む要因となったとは、わたしにはとうてい理解できない。

いわゆる『文学理論の諸問題』（一九二九年九月千倉書房）の時期に平林が葛藤し続けた芸術的価値に対する二元論的懐疑への道を、かれの初期文芸評論から探っていこうとすることは妥当であり、そこから平林の全体論への扉が開かれるし、むろんわたしも今後手を下さなければならない。しかし、伴のように、平林の生きた時代の社会的背景をさぐり、マルクス主義との接触時期を憶測し、平林の「〈唯物史観的文学理論史〉にかかわる、おもだった観点に即応できるものだけを抽出し、概括し」たのでは、容易に平林の「懐疑」への道程はさぐれまい（もちろん、それらが不要だといっているのではない）。前述したように、あくまで「するどい直覚力」と「明敏な頭脳」に裏打ちされた、平林の文芸批評家としての独自性を中心に据えながら「懐疑」への道を調べあげねばならない。そして、ここにのみ平林初之輔の全体論を定立させる出発点があると考える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com